



Title	「が」と「は」 : PartI
Author(s)	高野, 泰邦
Citation	長崎大学留学生センター紀要. vol.11, p.1-21; 2003
Issue Date	2003-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/5594
Right	

This document is downloaded at: 2019-02-17T04:05:00Z

「が」と「は」*

Part I

高野 泰邦

本題（「が」と「は」）は、2つのPartから構成される。Part IとPart IIである。本稿はPart Iで、Part IIは次号の同紀要に掲載予定であったが、急遽本号に続けて掲載することにした。

[キーワード]：主語をマークする「が」、焦点をマークする「が」、トピックをマークする「は」、総称をマークする「は」、対比をマークする「は」、強調をマークする「は」

1. はじめに

日本語の統語構造において、最も重要な働きを担っている2つの助詞、「が」と「は」の問題は、国語学、日本語学、言語学のいずれの分野でも長い間研究され続けてきた永遠のテーマと言えよう。本テーマについて、上記の各分野の研究者は過去に実に様々な分析結果を報告している。しかし、残念なことにそれらの分析結果が必ずしも満足のできる形で報告されているとは言い切れない部分がある。問題の核心はどうも2つの助詞の機能の深層を流れる言語学的な原則をどう捉えるかということに起因しているようだ。

本稿では、これらの2つの助詞の機能について大胆かつ魅力的な仮説を言語学的観点から提案したい。提案しようとしている仮説が大胆な理由は、これらの2つの助詞の研究の歴史において本仮説のような大胆な分析を提供している分析報告は過去に例を見ないという事実が挙げられる。そして、この大胆な仮説が魅力的な理由は、これらの2つの助詞を日本語学習者がある有限の期間内に学習し得て、それがなおかつ普遍的な言語の特徴を的確に捉えられている、ということに起因しているからである。

仮説は、その性質上、以下のように提示する。

「が」と「は」についての仮説

- (a) 「が」の基本的な機能は、文の主語をマークすること。また、「が」はある種の文の主語を含めた句をマークする焦点という機能もある。この焦点をマークする「が」は、句の他に、ある複文の節もマークする。
- (b) これに対し、「は」の基本的な機能は、文のトピックをマークすること。総称をマークする「は」および対比をマークする「は」は、トピックの「は」の特殊なケースである。もう1つ認知しなければならない機能は、強調をマークする「は」である。

上記(a)と(b)から明らかなように、本仮説は大きく2つの命題から構成されている。1つは「が」の機能について、そしてもう1つは「は」の機能についてである。本稿において、筆者は本仮説がこれらの2つの助詞を言語学的に捉える方法として最小限で、かつ経済性を追求し得た仮説であると主張したい。以下、Part I 及び Part II にわたって本仮説を主張する根拠を数多くの文例および言語学的用語を媒介として論証していく。

本稿では、仮説に基づいて「が」と「は」の機能の有効性、正当性、及び妥当性を検証していく。なお、Part II ではこれまでに言語学の分野の研究で築き上げられてきた専門的な知見や技術を応用して本仮説の整合性を言語学的な観点から裏付ける工夫を試みる。

2. 「が」

「が」は、言語学の分野では少なくとも2つの機能があることが報告されている。1つは主語の「が」であり¹⁾、もう1つは総記の「が」である (Kuroda [11]、Kuno [8] を参照)。しかし、筆者はこの「が」について以下の2点を本稿で主張したい。まず第一に、基本的な「が」の機能は文の主語をマークすることであり、第二に、これまで総記の「が」として記述されてきた「が」は実のところ焦点の「が」として扱われるべきものであり、この焦点の「が」の機能はある種の文型の主語を含める句、あるいはある複文の節をマークするものである。

2. 1. 主語の「が」

本小節では、「はじめに」で紹介された「が」についての仮説の第一の命題を

詳しく検討することから始めることにする。その部分を以下のように切り離して考えてみよう。

(a) 「が」の基本的な機能は、文の主語をマークすること。

上記仮説(a)によって、日本語における実に多くの主語をマークする文型が変則的な条件に縛られることなく極自然な説明がなされる。

まず最初に、WH語と呼ばれる語が主語の位置に現れた文型である。この文型の主語は義務的に「が」によってマークされなければならない。その理由は、WH語は疑問詞で、話題化 (Topicalization) や対比化 (Comparison) を誘発しないという事実に基づいている。この事実を念頭に、次の例文を検討されたい。

- (1-1) a. 誰がきますか。
 b. 鈴木さんがきます。
 c. *誰はきますか。
- (1-2) a. いつが (お) 誕生日ですか。
 b. 7月4日 (が誕生日) です。
 c. *いつは (お) 誕生日ですか。
- (1-3) a. 何語が一番難しいですか。
 b. 日本語が一番難しいでしょう。
 c. *何語は一番難しいですか。

第二に、しばしば「現象文」として言及される文型である。現象文というのは、発話者が特定の談話文脈で見たり、あるいは観察したりしたことを発話、あるいは報告する文のことを言う。²⁾

- (2) a. 雨が降っています。
 b. さっき地震がありました。
 c. 松井がホームランを打った。

- d. あ、トンボが飛んでいる。

本稿では、これらの例文に現れる「が」は全て主語の「が」であり、また変則的な条件に頼ることなく極自然に説明がなされる文型として捉えることにする。

第三の文型は、関係節の中に現れる主語をマークする「が」である。関係節の中の主語は「が」となる。³⁾

- (3) a. 田中さんが買った車
b. 山田さんが書いた論文

第四の文型は、従属節を含む複文の中の主語をマークする「が」である。この文型の主語もやはり「が」によってマークされなければならない。

- (4) a. 田中さんが引っ越したので、寂しくなりました。
b. 田中さんが引っ越してから、寂しくなりました。
c. 田中さんが引っ越したため、寂しくなりました。
d. 田中さんが引っ越したら、寂しくなりました。
e. 田中さんが引っ越すまで、寂しくありません。

第五の文型は、連続する2つの助詞「の」と「は」によって従属節（あるいは前節）と主節（あるいは後節）を繋いでいる、いわゆる分裂文というものである。この文型の主語もまた「が」によってマークされなければならない。

- (5) a. 新学期が始まるのは、四月です。
b. コンピューターがよく売れるのは、NECです。

最後の文型は、いわゆる慣用的に使われる文で、その主語は「が」によってマークされる。

- (6) a. 気が狂う。
b. 腹がへる。
c. 仕方がない。

分類上6種類に分けて例示した文型の主語は、変則的な条件を立てることなく、主語をマークする「が」によって表される。この観察は過去のどの分析にも見ることのできない観察であり、より多くの文型の主語が主語をマークする「が」によって自然な説明が施されるのである。また、これらの例文の中に現れる「が」は無標の「が」であると言える。

2. 2. 連続して現れる「が」

2. 1では、総記と呼ばれる「が」は実は主語をマークする「が」であり、それにとって代わられるべきであることを主張した。本小節では、この主張が実に正論であるということを各種の実例を基に実証していく。

まず始めに、用語「総記」は限定的（特に日本語という言語に限定的）であるという点を指摘したい。それに対して、用語「焦点」はより一般的であり、事実、英語などの言語でも通用する用語なので、強いて言えば普遍的でさえあると言える。この点を考慮に入れて以下の例文を検証してみよう。例文(7)は、Kuno [8] に依る。

- (7) a. 男性が平均寿命が短い。

It is males whose life span is short.

- b. 日本が男性が平均寿命が短い。

It is Japan and its males that the life span is short.

上の英訳にも示されているように、(7)aの「男性が」と(7)bの「日本が」および「男性が」は英語の文型の中の焦点という場所に位置しているのがお分かりいただけるだろうか。この事実は、このような文型においての句（1つあるいはそれ以上）はこれまで長い間研究者の間で踏襲して使われてきた用語「総記」ではなく、「焦点」であることを裏付けている。

焦点をマークする「が」によってマークされた句は何もこれらのタイプの例だけに止まらない。つまり、「総記」よりも「焦点」の方がより適切な用語であるということを裏付ける例は他にも数多く存在する。例えば、次の例文を見られたい。（焦点化と見なされる「が」だけを強調文字およびそれに下線を施して示すことにする。）

- (8) a. これからが本番です。
 b. 10ページまでが宿題です。
 c. ビールは夏の間が一番うまい。
 d. えびは生で食べるのが一番おいしく感じる。

上の例文で示そうとしているのは、様々な格を持った句、あるいは複文の節までが焦点化されるという事実である。句あるいは節が焦点化される位置にある時、日本語においては「が」によってマークされるのである。

2. 3. 主語をマークする「が」の特殊なケースとしての焦点の「が」

下記の(9)に示された「が」を見られたい。

- (9) ジョンが学生です。

例えば、Kuno [8] はこの「が」の機能を総記の「が」として捉え、論を展開している。更に、Kuno は上の(9)の文に次のような英訳を施している。

- (Of all the people under the discussion) John (and only John) is a student.
 (今話題になっている人たちの中で) ジョン (だけ) が学生です。

つまり、ここでのジョンは総記のリストの中からただ1人選ばれたジョンを意味すると言うのである。この英訳に関しての Kuno の直感には同意できるが、本稿ではこの同一の「が」に対して幾分違った角度から観察の手を加えたい。つまり、この「が」は Kuno が主張するような総記の「が」ではなく、焦点をマークする「が」であり、更にはこの焦点という機能に主語をマークする「が」が共起している、という観察である。従って、この特殊な例文は以下のようなインフォーマルな解釈が施されるべきなのである。

- (9)' ジョン が 学生です。
 主語
 焦点

これをもっと突き詰めてより精緻に述べれば、この「が」は2つの機能（つまり、主語および焦点）を同時に持ち合わせた「が」であると言うべきなのである。更に核心を突いた表現にすると、この「が」の主とする機能は主語であり、その主語という機能に焦点をマークする「が」の機能が融合した形になっていると言えるのである。

この種の「が」と同じ機能を持つ例文を以下2つほど確認してみよう。

(10) a. 今、長崎 が あつい。

主語

焦点

b. 蟹は、北海道 が 本場だ。

主語

焦点

本小節で論じてきた「が」は、本小節の始めに示したように、より一般的な命題のある特殊なケースであるということを再びここに確認して本小節を終えることにする。つまり、これらの例文では本来の主語をマークする「が」に特殊なケースの焦点をマークする「が」の機能が付け加えられ、新しいタイプの主語が創造された、と見なすべきなのである。

2. 4. 「が」の曖昧さ

下記に示す例文の中の「が」が2通り（つまり、「中立叙述」と「総記」）に解釈できるという指摘を最初にしたのは、Kuroda [11] である。

(11) ジョン が 来た。

a) 中立叙述: *John came.*

b) 総記: *John (and only John) came.*

本稿では、Kuroda のこの観察（「が」が曖昧に解釈できるという観察）は基本的に正しいと判断する。しかし、同じ例文を本稿の枠組みの中で再分析し、その結果を以下に示したい。つまり、この「が」は、Kuroda の主張する「中立叙述」や「総記」ではなく、それぞれ「主語をマークする「が」と「焦点をマー

クする「が」に改めて提案したい。

(12) ジョン が 来た。

a) 主語：*John came.*

b) 焦点：*John (and only John) came.*

上の曖昧さという観察に関連して、2. 1で検討した主要な文型（分裂文と慣用的表現は除く）の主語をマークする「が」はこれらの2つの機能（「主語」および「焦点」）のどちらの機能の解釈も可能であるということをここに記しておきたい。

これまで検討してきた結果は、冒頭に掲げた「が」にたいする仮説が心理的にも言語学的にも真であり、従って説得力のあるものであるということを本節の結論とし、時節では「は」についての論を展開していくことにする。

3. 「は」

助詞「は」も、過去の分析結果によると、少なくとも3つの異なった機能があると見なされている。つまり、トピックをマークする「は」、総称をマークする「は」、そして対比をマークする「は」である。

本節では、「は」の基本的な機能はある文のトピックをマークすることで、総称をマークする「は」および対比をマークする「は」はトピックをマークする「は」の特殊なケースであるということを主張したい。また、「は」にはこれらの3つの機能の他にも「強調」をマークする「は」が存在し、その存在を認知しなければならないということも主張したい。

以下、トピックをマークする「は」、総称をマークする「は」、対比をマークする「は」、そして強調をマークする「は」の順で論を展開していく。

3. 1 トピックをマークする「は」

まず、冒頭で提示した以下の「は」に対する仮説を再確認することで本小節を始めることにする。

(b) これに対し、「は」の基本的な機能は、文のトピックをマークすること。総称をマークする「は」および対比をマークする「は」は、トピック

クの「は」の特殊なケースである。もう1つ認知しなければならぬ機能は、強調をマークする「は」である。

まず始めに、上記仮説の第一の命題（つまり、「は」の基本的な機能は文のトピックをマークすること）についての議論から始めることにしよう。

世界中の多くの言語において、ある文のある要素が話題化（つまり、トピカライズ [Topicalize]）されるということはよく知られた事実である。しかし、言語によってこの話題化がどのようになされるのかということに関しては、諸言語の諸々の表現の仕方によって表面上異なってくるということも見逃してはならない事実である。日本語の話題化においてもこのことは当てはまると言える。そこで、日本語の話題化の例（特に「は」によって話題化される文型）をいくつか観察してみよう。

- (13) a. ジョンがビルにメアリーを紹介した（こと）。
b. ジョンはビルにメアリーを紹介した。
c. メアリーはジョンがビルに紹介した。
d. ビルにはジョンがメアリーを紹介した。

(13) a の例は無標の文であることに注意されたい。つまり、この文に特別な談話の文脈を想定しなくてもこの文は文法的であり、文意は伝わるということである。(13) a のような文はしばしば生成文法では与格文 (Dative Sentence) として言及されている。ところが、(13) b-d の文は、これらの文が意味の通じる文として認識されるためにある適切な談話の文脈の中で発話されなければならないということを示している。つまり、(13) b-d の「は」でマークされた句はそれぞれその文のトピックになっているのである。

更に下記の他の種類の句が話題化された例を見てみよう。

- (14) a. そのバスが長崎から福岡に行く（こと）。
b. 長崎からはそのバスが福岡に行く。
c. 福岡にはそのバスが長崎から行く。

(14) b は、起点格（つまり、「から」）の句が話題化されたことを示している。

一方、(14)cは、方向格（つまり、「に」）の句が話題化されたことを示している。これらの例の他にも、「まで」、「で」あるいは「と」でマークされる句も話題化を誘発する。

- (15) a. 長崎まで電車でいきます。
 b. 長崎までは電車でいきます。
- (16) a. 京都で大きな祭りがあります。
 b. 京都では大きな祭りがあります。
- (17) a. 田中さんと3ヶ月前に会いました。
 b. 田中さんとは3ヶ月前に会いました。

上の各例で示されているように、様々な文法関係を持った句（あるいは格を持った句）が話題化されることが分かった。

これらの例の他にも、主語が話題化を義務的に誘発する文型がある。その文型は、述部に WH 語を含む文型である。

- (18-1) a. あなたは将来何になりたいですか。
 b. わたしは弁護士になりたいです。
 c. *あなたが将来何になりたいですか。
- (18-2) a. ホワイトさんは（今）どこに住んでいますか。
 b. ホワイトさんは文教町に住んでいます。
 c. *ホワイトさんが（今）どこに住んでいますか。
- (18-3) a. 銀行は何時まで開いていますか。
 b. （銀行は）4時まで開いています。
 c. *銀行が何時まで開いていますか。

最後に、複文の節が話題化される例を以下に示す。

- (19) a. バラが咲くのはは5月です。
 b. クラスに来なかったのはは病気だったからです。

このように、種々の文法関係を持った句(あるいは格を持った句)、あるいは節が話題化を誘発する。話題化されたそれらの句あるいは節は、ある適切な談話文脈の中で発話者によって発話されたものであり、これらの話題化された句あるいは節に対応する残りの文に対しての最も重要な情報として発話されているのである。

3. 2. 総称をマークする「は」

Kuno [8] は、「総称」と分類することのできるある種の名詞(あるいは名詞句)が存在するということを報告している。そして、その総称名詞の例として、「鯨」、「猫」、「人」、「アメリカ人」、「太陽」、「言語学者」などを挙げている。Kunoによれば、それらの総称名詞は永久的に談話文脈の中に組み込まれることのできる名詞であり、特別な談話の文脈が設定されなくても「は」によってマークされる名詞群であると主張する。次の例を見られたい。

- (20) a. 鯨 は 哺乳動物である。
 総称
 b. 人間 は 考える葦だ。
 総称
 c. 太陽 は 東から登る。
 総称

しかし、直感的に言ってこの「は」が前節で論じられたトピックをマークする「は」とどのように違うのかがはっきりしない。もしトピックの「は」と総称の「は」に違いが存在するとすれば、それは前者の「は」が発話時点で談話の文脈を必要とし、後者の「は」は談話文脈を必要としないというところにあると言える。つまり、トピックの「は」は談話文脈を必要とし、総称の「は」は談話文脈を必要としないで発話が可能ということになる。この観察は一見当たっているようにも見える。

しかし、この観察(つまり、総称の「は」は発話時点で談話文脈を必要とし

る「は」の例文をもう2つ、3つ観察してみよう。

- (22) a. 魚 は よく食べますが、肉 は あまり食べません。
 対比 対比
- b. 日本語で は 歌えますが、英語で は 歌えません。
 対比 対比
- c. 昨日 は 大学に行きましたが、明日 は (大学に)行きません。
 対比 対比

(22) a では、「魚」という名詞と「肉」という名詞が互いに対比された形で使われている。互いに対比されたこれらの2つの名詞は文法関係上目的語であるという事実を確認されたい。(22) b では、「日本語で」という様態を表す副詞句と「英語で」というこれも様態を表す副詞句が互いに対比されている。最後に、(22) c についてであるが、「昨日」という時を表す副詞と「明日」という時を表す副詞が互いに対比されている。

これらの句の他にも様々な文法関係を表す句が対比されるようである。更に次の例文を観察されたい。

- (23) a. ジョンはメアリーをマイクに は 紹介したが、
 対比
 ジョーに は 紹介しなかった。
 対比
- b. 中から は 見えますが、外から は 見えません。
 対比 対比
- c. 3月まで は 待てますが、4月まで は 待てません。
 対比 対比
- d. 京都に は 行きたいですが、東京に は 行きたくありません。
 対比 対比

上の例文にも示されているように、実に多くの格（あるいは文法関係）を持つ句が対比として使われている。(23) a では与格名詞句が、(23) b では起点格名詞句が、(23) c では着点格名詞句が、そして(23) d では方向格名詞句がそれぞれ対比

されている。

Kuno の上記の「対比」をマークする「は」についての観察には同意できるが、果たして対比をマークする「は」と「総称」をマークする「は」とには一体どのような違いがあるのだろうか。この疑問が問いかけようとしている意図は下記の例を検討すればその糸口がみつめそうだ。

(24) 男 は つらい。
?

この例文に現れる「は」は一体どの機能を持つ「は」なのであろうか。トピックをマークする「は」なのであろうか。名詞「男」は、Kuno が主張するように総称名詞として解釈できるようなので、総称をマークする「は」なのであろうか。それとも対比をマークする「は」なのであろうか。この疑問はすぐに解答を得られるような性質のものではないようである。なぜなら、この例文そのものがこれまで検討してきた3つの「は」のどれにも該当し得る可能性が高いからである。

まず、この「は」を対比をマークする「は」と仮定して議論を進めてみよう。対比をマークする「は」と総称をマークする「は」の違いは一体何なのであろうか。あるいは、この「は」をトピックをマークする「は」と比較してみよう。2つの「は」の違いは何であらうか。やはりすぐには答えられないというのが母語話者の素直な直感ではないだろうか。しかし、これらの3つの機能に共通する特徴は見出せる。それは談話文脈の中における統語論上の「強調」ではないだろうか。要するに、これらの3つの機能はいずれも文の最も重要な情報を提供するという働きを持っていると言えはしまいか。つまり、それぞれの文の中で最も強調される情報を提供していると言えないだろうか。

3つの機能をどう識別するかという疑問に対する解答はこの時点では差し控え、後の節でもっと詳しく述べることにする。しかし、1つだけここで言えることは、トピックをマークする「は」と対比をマークする「は」はある構文においてしっかりと区別しなければならないということだ。この点をこのすぐ後に続く節で取り上げることにする。

3. 4. 連続して現れる「は」

日本語ではしばしばある文中に「は」が連続して現れる文型が存在する。ところが、往々にしてそれらの文型では文の最初に現れた「は」がトピックをマークする「は」であり、残りの「は」は対比をマークする「は」であるようだ。⁴⁾ 次の例文を見られたい。

- (25) a. 学生が教室で携帯電話を使っていない (こと)。
b. 学生は 教室では 携帯電話は 使っていない。
トピック 対比 対比

(25) b の中の最初の名詞「学生」をマークしている「は」はトピックで、それ以外の名詞（「教室」および「携帯電話」）をマークしている「は」は対比である、という筆者の直感を共有していただけるだろうか。やはり、文中の最も重要な情報を聞き手に伝える方法として「トピック」が使われるのではないだろうか。

3. 5. 強調をマークする「は」

これまでは、トピックをマークする「は」、総称をマークする「は」、対比をマークする「は」について概観してきた。本小節ではこれらの3つの「は」の機能の他に別の機能を持っていると考えられる「は」について論を展開することにする。まず、次の例文を見られたい。

- (26) a. 彼は食べては寝、食べては寝の生活を送っている。
?
b. 平和を祈っては失望に明け暮れる人
?
- (27) a. その宝石は百万円はする。
?
b. そこまでは1時間はかからない。
?

c. 全部は (とても) 食べられない。

?

(28) a. 物事は思うようにはいかないものだ。

?

b. 愛さずにはいられない。

?

上に示された例文の中の強調文字の「は」は一体どのような機能を持っているのであろうか。恐らく日本語学研究者はこの疑問にどう答えれば良いのか困惑しているのではなかろうか。その理由は、厳密に言えば上の「は」が指し示そうとしている機能をどう記述するかという観点では一見種々の機能が存在するかのよう直感があるからではなかろうか。従って、これらの例文に現れる「は」についてももう少し詳しく見ていくことにしよう。

まず、(26) a の例文に現れる「は」についてであるが、この「は」は動詞の「て形」に続き、そのすぐ後に動詞「寝」が続いて現れている（食べては寝）。この種の「は」の用法は日本語において特異なものとは認め難い。ここで大切なことは、「食べては寝」の中の動詞「食べて」と「寝」が「は」によって結ばれ、それらが1つの大きな動詞句を成しており、この部分が強調されていると言えるのではないだろうか。(26) b の例文も同じような趣旨のことが言える。つまり、(26) b では2つの動詞句が「は」によって連結されており（平和を祈っては失望に明け暮れる）この部分が強調されていると解釈できるのではなかろうか。ここでの強調という意味をもっと具体的に述べれば、(26) a では「食べる」と「寝る」、(26) b では「平和を祈る」と「失望に明け暮れる」の動作（あるいは状態）が繰り返されるということになる。

次に、(27) a について検討してみよう。この文の中の「百万円」という数量詞は、発話者が宝石は（絶対に）百万円以上するということを認識してこの文を発話したことを暗示している。従って、ここでの「百万円」は発話者の観点から見れば「少なくとも百万円」という意味合いで発話していることになる。つまり、この「百万円」という数量詞は文中において強調されていると見るのが妥当なのではないだろうか。これをもっと別の方法で表現すれば、発話者はこの「百万円」という数量詞を「少なくとも」という限定した意味合いを込めて

発話しているということになる。

(27) b の例文はどうであろうか。この文の発話者はある目的地まで行く時間について発話している。発話者は自分の過去の経験からその目的地まで行く時間は「1時間」以内、つまり、「どんなに長くても1時間はかからない」ということを知っていて述べている文である。つまり、「は」には「どんなに長くても」という意味合いが含まれていると見るのが妥当なのではないだろうか。

さて、次に、(27) c の中の「は」はどうであろうか。この文の「は」は副詞的表現「全部」をマークしている。述語「食べられない」は否定の形で現れている。日本語の場合、次のようなことが一般的な言語記述として成り立つようだ。つまり、述語が否定の時、否定される対象（この文の場合は「全部」）は「は」でマークされる。具体例で示すと、「食べられない」が否定辞で、その対象は「全部」である。「は」でマークするかマークしないかは多くの場合発話者の選択にかかっていると言えるが、マークする場合にはマークする対象が発話者によって強調されたと考えるのが自然だろう。（この時、否定された対象はその対象以外の対象と対比された形で現れることもある。しかし、この点については本稿ではこれ以上深入りしないことにする。）従って、(27) c の例文では「全部」が強調されて述べられた文であると解釈するのが妥当であると考えられる。この文を更に詳しく分析すれば、発話者に次のような含意があったと考えられる。つまり、ある食べ物をどれくらい食べられるのかということがこの文を発話する基になっており、「もし食べ物が「全部」であれば（とても）食べられない。恐らく食べ物の90%、80%、あるいは70%なら食べられるが、全部は（とても）食べられない。」というような発話者の心的状況を読み取ることができるのではなかろうか。

(28) a では、副詞的表現「ように」が「は」によってマークされている。結論から先に言うと、この文では「思うように」が、否定辞「いかない」の否定される対象となっており、この部分が強調されているということになる。(28) b の例文の中の「は」はどうであろうか。この文では、「愛さずに」が「いられない」という否定辞の対象になっている。従って、「愛さずに」が強調されていると言える。(28) a も(28) b も共にそれぞれの否定辞の対象である部分が強調をマークする「は」によってマークされた例文であると言える。

面白いことに、上に示された(26)–(28)の例文全ては「は」を省略して表現してもそれらの文の文法性（文法的であるということ）が維持される。以下にそれら

の文を見られたい。

- (29) a. 彼は食べて__寝、食べて__寝の生活を送っている。
b. 平和を祈って__失望に明け暮れる人
- (30) a. その宝石は百万円__する。
b. そこまでは1時間__かからない。
c. 全部__食べられない。
- (31) a. 物事は思うように__いかないものだ。
b. 愛さずに__いられない。

この時点で、これらの例文の中に現れる「は」に共通する性質（あるいは特徴）とは一体何なのであろうかという疑問が湧いてくる。その答えは「強調」という機能であろう。何故ならば、(29)-(31)の中に示された例文（つまり、「は」が省略されている例文）では「強調」という意味合いが全く感じられないという事実と、(26)-(28)の中の例文（つまり、「は」によってマークされた例文）では「強調」という意味合いが強く感じられるという事実に基づいているからである。従って、これらの例文に現れる「は」は強調をマークする「は」として、という結論を導き出すことができる。(26)-(28)の例と(29)-(31)の例を比較すると、「強調」をマークする「は」とそれ以外の機能を持つ「は」（つまり、トピックをマークする「は」、総称をマークする「は」、そして対比をマークする「は」）には統語論的観点から大きな違いが存在する。それは、「強調」をマークする「は」はそれが文中に現れなくても文法性が保たれるが、他の機能をもつ「は」は文中の主要な文法関係（主語および目的語）においては省略が許されないからである。

本小節の議論で明らかになったこと（つまり、(26)-(28)の中の例文の「は」は強調をマークする「は」として、ということ）を考慮に入れて、再びこれらの例文を以下に示すことにする。

- (26) a'. 彼は食べて は 寝食べて は 寝の生活を送っている。
強調 強調

b'. 平和を祈って は 失望に明け暮れる人
強調

(27) a'. その宝石は百万円 は する。
強調

b'. そこまでは1時間 は かからない。
強調

c'. 全部 は (とても) 食べられない。
強調

(28) a'. 物事は思うように は いかないものだ。
強調

b'. 愛さずに は いられない。
強調

強調という用語は、上の例でも確認したように「は」のいくつかの機能の1つを表すために採用したものであり、(26)-(28) (あるいは(26)'-(28)') で示した例文の中に現れる「は」全てを包括する一般的な用語であるということ、そして将来これらの一般的な用語の中に秘められているいくつかの精緻化された機能について更なる詳細な研究をする余地を残していること、の2点をここに強調して本稿を締め括りたい。

Part II では、本稿の冒頭で掲げた仮説が実に正論であるということを更なる言語学的根拠に基づいて論ずることにする。なお、参考文献の一覧表は Part II の最後の部分に添えることにする。

★ 本稿の草稿の段階で守山恵子氏より大変有益なご助言、コメント等をいただいた。特に、例文の適切さおよび提示の仕方、本文の表現の仕方において貴重なご指摘をいただいた。ここに氏に対する感謝の意を表したい。なお、本稿の内容における誤り、最終的判断は全て筆者のものであり、氏とは無縁のものであることをここに記しておきたい。

注

- 1) 主語という概念が日本語の文法を記述する際に必要であると最初に主張したのは、Shibatani [21] である。同じ内容を含む議論について、Takano [24] も参照されたい。「が」にまつわる以下の諸機能についての議論は本稿では割愛する。

イ) 目的語をマークする「が」

例 1 : 富士山が見えます。

例 2 : 車がほしいです。

例 3 : 明はスキーが上手です。

ロ) 接続助詞としての「が」

例 1 : 昨日映画を見ましたが、とても面白かったです。

例 2 : 昨日映画を見ましたが、あまり面白くありませんでした。

ハ) 属格の「が」

例 1 : 我が国

例 2 : 君が代

ニ) 強調の「が」

例 1 : 勉強しなかったが故に落第した。

例 2 : このあたりは雨が降ったが最後、一ヶ月以上も続く。

- 2) Kuno [8] は、事実、本稿の用語 (つまり主語をマークする「が」) とは異なった用語 (中立叙述) を使用している。しかし、Kuno の用語は、ある特定の文例、特に(2)に挙げられたような文型だけを指しているようだ。
- 3) 関係節の中の主語をマークする「が」は、多くの場合、助詞「の」との互換が可能である。

イ) a. 田中さんが買った車 → 田中さんの買った車

b. 山田さんが書いた論文 → 山田さんの書いた論文

- 4) この大まかな観察にはもっと注意深い解説が必要である。つまり、ここでの「最初に現れた『は』がトピックをマークする『は』であり」というのは、実は、その文が話題化する前の文の中で文法関係が主語であった名詞を意味する。従って、次のようなイ) bの例文では、トピックは2番目に現れている「は」である。

イ) a. 昨日学生がゼミで静かだった (こと)。

- b. 昨日は 学生は ゼミでは 静かだった。
対比 トピック 対比

(留学生センター教授)